

『蜀素帖』を通して見た米芾書法の真相への試論

遠藤 昌弘*

A Study of “On Szechwan Silk” by Mi Fu

Masahiro ENDOU*

Abstract

In the present study, it was attempted to compare the appearance of characters in “On Szechwan Silk” which is a calligraphy by Mi Fu of 38 years old with classical calligraphy mainly Wang Xi-zhi, see the character common or similar to the classical calligraphy and note the different characters. Through the present study, it was confirmed while citing examples of character in details that the character which does not depend on classics shows the ingenuity of Mi Fu own and, in study of 38-year-old Mi Fu, he was doing creative activities enthusiastically without having to stay in the classic learning.

— 目次 —

前言

- 1、宋の四大家としての米芾
- 2、米芾の生涯

3、米芾『蜀素帖』について

4、書法からみた米芾『蜀素帖』

結語

*駒沢女子大学 非常勤講師

前言

本稿では、中国書法史上において「宋の四大家」として能書家とされてきた米芾（1051—1107）の書例のうち、とくに『蜀素帖』（図1・図5・図8）について取り扱う。

米芾は、自らの書を評して「刷」の一字で表現したこと（『海岳名言』）はよく知られるところである。また周囲の米芾の書にたいする評は「集古字」であった（同前）。つまり古典の字を集めたものという意味である。米芾をのぞいた宋の四大家には蔡襄（1012—1067）・蘇軾（1036—1101）・黄庭堅（1045—1105）がいるが、このなかでも蘇軾・黄庭堅は、その書に古典の背景を見出しがたく、蘇軾・黄庭堅自身も古典からの拘束を嫌っていた。

蘇軾は、「字を識るは、患憂の始まり」（「石蒼舒醉墨堂」詩句）と言い、また「字は姓名を書ければ、それで良い」（同前）と述べている。黄庭堅は、書は「自得」といい、人格の完成による、自身の言葉である「超軼絶塵」の書を理想とした（『山谷題跋』）。二人に共通することは、従来から行われてきた当然の習慣である古典による学書の否定である。極言すれば自己の書の確立を究極の境地とするものである。むしろここでの古典否定は、伝統的な書法を学んだうえでのことであり、古典そのものを否定するものではない。しかし書の古典の代表である王羲之による書技の追及をはっきりと否定したことは過去においてなかったことであり、人々は革新の思考にさぞや驚かされたことであろう。書の大きな流れは、晋時代の「韻」にはじまり、唐時代の「法」を過

ぎて、宋時代の「意」を迎えることになる（梁巘『評書帖』）。韻とは王羲之の精神であり、法とは楷書の美的確立を述べたものである。これに「意」の意、つまり書技を超越して個人そのものである「意」を表現する芸術になったことを意味している。これは、おおきな時代の転換であり、ひとつの新世紀を迎えたのである。

こうした時代の思潮にさからうように書の古典尊重を意識し、実践したのが米芾である。本研究は、米芾三十八歳の書である『蜀素帖』の文字の姿を、王羲之を主とする古典書法と比較し、古典書法との共通または類似の文字を確認し、くわえて相違の文字を指摘する。これによって、古典に拠らない文字が米芾独自の創意工夫を示すものであり、米芾三十八歳における学書は古典習得に止まることなく、意欲的に創作活動を行っていたことについて具体的に字例を挙げながら裏付けることを企図したものである。

本稿では、第1章、宋の四大家としての米芾—において、「米芾の人と書」米芾が評した宋の四大家「米芾の狂気」をテーマに論述する。つぎに第2章、米芾の生涯—において、「米芾の出生」「米芾の生涯」「米芾の最期」をテーマに論述する。さらに第3章、米芾『蜀素帖』について—において、「蜀素の由来」「切り取られた蜀素帖」「蜀素帖に残された名家の言葉」をテーマに論述する。以上の内容をふまえて、第4章、書法からみた米芾『蜀素帖』—において、「蜀素帖の文字をどう見るか」「蜀素帖」にみる文字の特徴と変化「米芾の技量」をテーマに論述する。

本稿の初出は、稿者（遠藤）が書道研究玄筆会（埼玉県川越市新宿町）発行の『玄筆』誌に連載した「書美探訪」第六十一回（第一六九

号 2010) から第六十四回(第一七二号 2010)まで、米芾『蜀素帖』と題して執筆した小論である。これに加筆・修正を加えて、新たに書き起こしたものである。

1、宋の四大家としての米芾

1・1、米芾の人と書― 米芾は、北宋の皇祐三年(1051)に生まれ、襄陽(湖北省)の出身とされる。米という姓は、ほかにあまり聞きかたないが、その祖先は西域からの帰化人で、祖父の代より以前は武人であったとされる。名は、はじめ黻ふくといい、四十一歳以後は芾とした。字は元章げんしょうといい、号は鹿門居士・襄陽漫仕といった。また、晋の書画を収蔵したことから宝晋齋ともいった。米芾は、宋の四大家の一人に挙げられ書の名人とされた。ほかに蔡襄・蘇軾・黃庭堅がいる。ふつう、蘇黃米蔡と略されて呼ばれるが、蔡襄は蔡京(1047―1126)とするものもある。蔡京は、政治家として権勢を極めたが、皇帝をないがしろにしたことから極めて評判の悪い人物であった。これを理由に、おなじ姓である蔡襄に取り替えられたという説もあるほどである。さて、書家として高名な米芾であるが、点描によって山水を表現する米点山水(図2)の創始者として画家としても名を残した。著書に、『宝章待訪録』『書史』『画史』などがある。大觀元年(1107)、五十七歳で亡くなった。

『蜀素帖』(図1・図5・図8)は、台北故宮博物院に所蔵される名品の一つである。書かれた元祐三年(1088)は、米芾三十八歳にあたる。悠久の中国の書の歴史に、わずか三十八歳にして、そのうちの識者に認められ書名を刻んだ傑作である。

1・2、米芾が評した宋の四大家― 米芾の言葉を集めたものに、『海岳名言』がある。米芾が自分自身の書について、蘇軾・黃庭堅・蔡襄をひきあいながら述べた興味ぶかいはなしが載っている。……徽宗皇帝が当時の書の名人について、米芾に質問した。すると米芾は「蔡襄の字は勒(彫っている)である。黃庭堅の字は描(描いている)である。蘇軾の字は画(線をひいている)である」と答えた。さらに徽宗皇帝は、ではおまえ(米芾)の書はどうなのだと尋ねた。米芾は、「臣(わたし米芾)の書は、刷である」と答えた……。さて米芾が自分の書を評した刷とは、どういう意味であろう。このことを考えるうえで『海岳名言』にある別のはなしが参考になる。……自分(米芾)は、若い頃に書風が確立していなかったために、人から集古字(古典の字を集めたもの)と呼ばれていた。それは書の古典から、よい字をえらんで書いたためであった。さらに年老いる頃になると書風ができあがったが、人々はわたしの書の拠りどころが何かわからなかった……。これで刷とは印刷の刷とおなじく、そのまま、古典の字を写すという意味に考えてよいであろう。皇帝の目の前で刷と言ってはばからなかったのだから、古典を臨書して自家葉籠中のものにした自信のほどは相当なものである。さきほどの集古字という言葉も、表面的には謙遜したものの言いのようにも思えるが、考えようによっては自慢しているようにも受け取れよう。

1・3、米芾の狂気― 伝記を調べてみると、米芾という人は困っ

た人で、人から借り出した晋人の筆跡を摸写しては、その摸写本を返して気づかれなかったことを悦にいたり、また晋人の筆跡であるかのようにこしらえた自分の字が、晋人の筆跡として人々のあいだに高値で取引されているのを知って喜んでいた人で、こんなにも自分の技量が優れていると得々と自慢しているのである。このことを裏付けるように、一説には『淳化閣帖』には米芾の摸写本が王羲之の書として刻されているものがあることを指摘する識者もいるくらいである。もうここまでくるとただの好き者をとおりこして、正気の沙汰とは言えないだろう。常軌を逸した感があるが、この狂気とも言うべき執拗さ、徹底した古典の臨書による技法獲得への執着が、米芾その人なのである。古典と見分けがつかないほど、そっくりになれた時に使われる評語に、「真を乱す」という言葉がある。これは古典を習って本物か模写したものか判別できないほど優れているという意味である。真を乱すほどの贋物をつくることのできた米芾は本当のテクニシャンであったということができようであろう。

2、米芾の生涯

2・1、米芾の出生― 米芾は、北宋の皇祐三年（1051）五月に生まれた。はじめの名は黻であつたが、四十一歳以後は芾にした。文献には……米芾が自分で言うことには、黻は芾である。だから芾にした……という記事（『京口耆旧伝』『襄陽志』）があるだけで、改名の理由ははっきりしない。米家は、代々武人の家柄で、米芾の父の米佐も武衛將軍として武官をつとめ、中散大夫会稽公（名譽官位）を賜つ

た高官であつた。母は閭氏で、英宗の皇后に仕え、丹陽県太君（名譽官位）を賜つた貴人であつた。

2・2、米芾の生涯― 六歳にして詩百首を暗誦し、七歳のころには顔真卿を学び、十歳にして書名が知られるほどの早熟ぶりであつた。二十歳のとき、母の宮中での功勞を理由に官僚にとりたてられ、秘書省校書郎の身分をえて、浚光尉（浚光は、広東省にある地名）という地方官に任命された。母の閭氏の功勞の内容について具体的に述べるものはないのだが、産媼であつたとする記事（『鷄肋篇』『別伝』米襄陽志林）がある。産媼とは、産婆つまり助産師である。英宗のあとをついだ神宗皇帝を、出産の際にとりあげたのが閭氏であつたのかもしれない。真実はわからないが、太君の榮譽をあたえられていることや、米芾の異例ともいえる登用は、そうとうな貢献があつたことを裏付けているようである。二十九歳と三十二歳のときには、唐代を代表する能書家の歐陽詢「度尚帖」「庾亮帖」を入手している。米芾は、若くして名品を集めることに熱心であつた。三十四歳のとき、十五歳年長の蘇軾に面会したことが、米芾の学書の大きな転換となつた。これより晋人（王羲之・王献之など）の書を専習して、書境（書のレベル）は大いに進んだとされる。蘇軾は、政治家であり文章家であり、また能書家としても知られ、当時の知識人からの尊敬を一身に集めていた。この年には王献之「十二月帖」と王羲之「快雪時晴帖」が合装された蘇氏法帖という大名品を入手したが、これも大いに米芾を刺激し影響を与えたことであろう。三十八歳以後は、米芾の書の真跡がのこされ

て、その真相を知ることができる。二月、褚遂良臨「蘭亭序」を入手する。いま北京故宮博物院所蔵の褚遂良臨「蘭亭序」(八柱第二)に、米芾の題詩と題跋(図3)を確認することができる。八月には「苕溪詩卷」(図4)を、九月には「蜀素帖」(図1・図5・図8)を揮毫している。この二点は晋人の書に熱中した成果を示すもので、その神業ともいえる技量は、これを実見した誰しもが賞賛してやまないものである。四十二歳、蘇軾(五十七歳)と再会する。米芾は酒食をともにし、書を揮毫して夕方になったとあることから、米芾の蘇軾に対する心情の深さは計り知れないものがある。四十四歳、監中岳廟(官職名)に任命されたことから、中岳外史を号とする。米芾真跡本「樂兄帖」(図6)はこの頃の作とされる。五十三歳、王羲之「王略帖」を入手する。五十四歳、書画學博士(官職名)になる。無為軍(安徽省にある地名)の知事となり、官舎に王羲之「王略帖」・謝安「八月五日帖」・王献之「十二月帖」を石に刻して、宝蓋齋の額をかかげて自分の齋号とした。五十五歳、礼部員外郎(官職名)南宮とよばれていた)になる。米芾は、この官職に由来して、米南宮とも呼ばれるようになった。

2・3、米芾の最期―大觀元年(1107)五月、首にできものができて、淮陽軍(江蘇省にある地名)の官舎において五十七歳で亡くなった。亡くなる一カ月ほどまえには遺言をかき所蔵の書画は焼却し、七日まえには着替えをして入浴をすませ香をたいて静坐し、亡くなるときには「衆香國中より来たり、衆香國中に去る(國中からたくさんさんの良いかおりは私のもとに集まり、また國中に散ってゆく)」と

告げて、私子(毛を束ねた持ち具)をはらって合掌したとされる。米芾の最期の言葉にあった香とは何であろうか、仏の香であろうか、それとも生涯蒐集して愛賞してやまなかつた書画の名品ことであろうか。伝記では書画は焼却したはずであった、しかし褚遂良臨「蘭亭序」をはじめ米芾の題跋がある書画も少なからず残っていることも確かである。中国では、名品の書画を収集するさまを雲煙過眼ともいう、いつしか見えて、また消えてゆく、収蔵と散逸の宿命を述べたものであるが、香も、そうしたことを託しているようにも稿者(遠藤)には思える。

3、米芾『蜀素帖』について

3・1、蜀素の由来―蜀素とは、蜀の東川(四川省の地名)において織られた素(しろきぬ)のことである。この蜀素には烏糸欄(黒色の罫線)が織り込まれたもので、米芾(ときに三十八歳)が揮毫した自詠詩七首が『蜀素帖』(図1・図5・図8)と呼ばれるものである。『蜀素帖』の末尾にある邵希(林希とする説もある)と胡宗愈の跋文は、米芾が揮毫するまでの蜀素の由来と経緯を記している。邵希の語には、……慶曆四年(1044)に東川で織られた蜀素は、二十余年をへて卷子に仕立てたので、さっそく書の名人たちに揮毫してもらいたい。熙寧元年(1068)三月……とあり、また胡宗愈の語には……熙寧八年(1076)四月、徐道潤・閻丘公頤とともに邵希の東園に招待されて、数編を鑑賞した……とある。邵希が希望した書の名人たちによる揮毫は、胡宗愈が鑑賞したときには数編が存在したようである。この胡宗愈が鑑賞してから十二年がたった元祐三年(1088)九月、

米芾に揮毫の依頼がきた。邵希は、じつに二十年の歳月をかけて、名人の揮毫を探し求めていたことになる。

3・2、切り取られた『蜀素帖』――跋文にある胡宗愈の語によれば、米芾の揮毫以前に何人かの名家の書があったと考えて良いであろう。残念ながら、いまの『蜀素帖』には米芾以外の書は残されず、邵希の依頼によって誰が揮毫したのかわからない。米芾と同等か、それ以上の名人と思われるが、いつのころか切り取られて別に仕立てられて、それぞれに鑑賞されたのである。『蜀素帖』にある米芾の筆跡には、修正や訂正が四箇所（図7）ほど見受けられるが、自分の書く以前に名人の筆跡があるのを見て、緊張が高まったのかもしれない。また『蜀素帖』七十一行中の冒頭にくらべて二十行を過ぎたあたり（図8）から、文字のおおきさや書きぶりが大きく異なっている。臨書をするときに理解できるが、『蜀素帖』冒頭はひじょうに運筆が緊張して一文字一文字が慎重に書かれている。それがしだいに運筆がリズムカルになって、朗らかに開放された気分で書かれている。米芾ほどの名人ですら神経をとがらせたのは、時の名人の筆跡にひけをとらないように書かなくてはとの理由があったからなのである。

3・3、『蜀素帖』に残された名家の言葉――『蜀素帖』には、沈周（1427―1509）・文徵明（1470―1559）・董其昌（1555―1636）など、歴代の名家による題跋識語が記されている。まず『蜀素帖』に三度の跋文を残した董其昌の言葉である……

この巻の文字は、獅子が象を捉えるようである。全力で揮毫して生平合作（生涯最高の傑作をいう）である。わたし（董其昌）はかつて『戲鴻堂法帖』を編集したが、このときは『蜀素帖』の摸写本をつかった。そしてついに大収蔵家の呉廷から、わたしが収蔵した諸名跡と交換して『蜀素帖』真跡を入手した――以下略……。董其昌がいかに米芾の書の評価し、その中でも『蜀素帖』には格別の思い入れがあったことがわかる。これに対して沈周は、米芾にたいして批判的である……米芾は晋唐の書を愛賞して臨書していた。ときに自分の臨書を真跡として人々を惑わし、そのことで批判された。のちに宋の四大家として高く評価されるが、その悪事は許されるべきではない。いま『蜀素帖』の冒頭に題字を書くことを求められたが、私の頭（尊いもの、たえ）にものを置くようなもので、そんな罪深いことは出来ない。ただ蘇軾先生は米芾を評して「清雄絶俗の文、超妙入神の字」と誉めたことを、ここに記して依頼者の求めに応じることにする……。沈周は、米芾の書の才能は認めていたが、人をだました行為を許すことは出来なかつたようである。あまり書のほうでは活躍していないが顧從義（1523―1588）の言葉も名品の流転の逸話として興味深いことから、以下に引用しておく……前文略――わたし（顧從義）は『蜀素帖』を所蔵してから、身辺から離すことはなかった。あるとき文徵明先生にお会いしようとして書画を持参したが、『蜀素帖』だけを忘れてきた。すると利用していた舟が転覆して書画を失ってしまった。文徵明先生は『蜀素帖』はどうしたかとお尋ねになられたが、忘れてきたというと、これこそ神のご加護とおっしゃられた……。『蜀素帖』が今日まで残ったの

は古物有靈（ふるく価値あるものは自らの力で危機をくぐりぬけると
いう中国のことわざ）の言葉どおり、まさに奇跡であった。

4、書法からみた米芾『蜀素帖』

4・1、『蜀素帖』の文字をどう見るか― 人々から集古字とよばれ、
自分の書を刷と評して、古典への熱中ぶりを自認した米芾であった。

その技量のほどを『蜀素帖』に書かれた文字を点検して、その出典を
調べてみることを試行した。しかし結論から言うと、『蜀素帖』にある
特徴的な文字、例えば図9F「雲」の雨冠あめかんむりや図9I「湖」のさんず
いなどの例が、なにか古典に例があるのではないかとという目論みもくろみは見
事にはずれて、これといったものが見つからなかった。このほかの『蜀
素帖』にある特徴的な字例として凌（本文二行目）・羞（五行目）・華
（八行目）・得（十一行目）・慎（十四行目）・水（四十二行目）・莫（七十
行目）などを検討したが、同様に古典に字例を見つけることができな
かった。そこで『蜀素帖』に対する考えをまったく逆に考えてみたの
である。それは米芾が古典に拠って揮毫したという従来の通説から離
れて、古典に拠らないことを意識して揮毫に挑戦したのではないかと
いう仮定である。

4・2、『蜀素帖』にみる文字の特徴と変化― 『蜀素帖』にみる文
字の変化を検討するまえに、王羲之書法を受け継いでいる点を指摘し
ておく。図9A「葉」・図9B「靈」は王羲之書法そのもので、冠部
分を左において下部になると中心を右にずらして文字のふところの広

さを見せるやり方は、王羲之の真相を伝えるとされる『喪乱帖』の字
例と共通する文字構造である。このことは従来の識者の指摘を裏付け
るものである。

つぎに、文字の変化について検討する。一文字だけでは具体的に検
討しにくいので、重複する文字で見ることにする。重複する字は、多
い順位に、「雲」六例・「秋」四例・「鶴」四例・「氣」四例・「年」三例・
「湖」三例・「漫」三例・「青」二例・「松」二例・「錦」二例・「華」二
例・「龜」二例・「書」二例・「風」二例・「神」二例があった。

六例がある「雲」のうちの四例が、図9C（本文五行目）・図9D（十四
行目）・図9E（四十八行目）・図9F（六十三行目）である。細かく
みると限りがないのであるが、一目して指摘できるのは雨冠である。
四種すべてが異なる姿をしているのがわかる。また図9C・図9Eま
では、さきほど述べた王羲之書法であるが、図9Fだけは文字構造の
中心を移動させない顔真卿書法に共通するものである。米芾が王法と
顔法を交えていることは間違いないようで、まさに技量を誇示すると
は、こういうことなのであろう。

「氣」は四例があるが、このうちの二例が図9G（二十行目）・図9
H（五十行目）である。図9Gは、氣構きがまえをひろくとって米は控えめで
ある。これとは逆に図9Hは、氣構はつめて米の最終二画のハをひろ
くしている。一見するとなにげなく揮毫しているようであるが、そう
とう伝統書法に対しての興味を意識して書かれたものであることは
推測できよう。

「湖」は三例があるが、このうちの二例が図9I（二十行目）・図9

J（五十八行目）である。特徴的なのはさんずいである。図9Iにみる、こうした二点をかいて三点目をLのように誇張するのは王羲之書法の拡大解釈なのであるが、古典には見ないものである。ただ米芾は図9Iのさんずいのやり方は、図9Jでは普通にしている、得意になつて繰り返さないのは上手な演出であり、さすがは米芾とよべるほどの名人芸である。

「年」は三例があるが、このうちの二例が図9K（十行目）・図9L（五十六行目）である。文字にある横画四本をつめて最終画を長く強調するのに対して、横画四本をひろくして最終画の長さを強調しない字姿である。

4・3、米芾の技量―多数の重複する字例のうち四字を検討したにすぎないが、それぞれの字を変化させて揮毫していることは、まったくもつて驚くべきことである。それは米芾が従来通説にある古典を守ることにだけに終始したのではなく、意欲的に古典に挑戦して、「我より古をなす（私は、古典に劣らないほどの様式を創出してゆく）」という中国の諺どおり、古典にない新しい様式をめざしていたことは、『蜀素帖』によつてよく示されているもので、従来指摘にある米芾にたいする考えを改める必要がある。

結語

本稿における研究成果は、第4章において指摘した通り、米芾三十八歳の書である『蜀素帖』の文字の姿を、王羲之を主とする古典

書法と比較し、古典書法との共通または類似の文字を確認し、くわえて相違の文字を指摘した。

これによつて、古典に拠らない文字が米芾独自の創意工夫を示すものであり、米芾三十八歳における学書は古典習得に止まることなく、伝統書法に対しての興味を意識して意欲的に創作活動を行つていたことについて具体的に字例を挙げながら裏付けることができた。

従来の研究が、第2章で述べたように米芾の学書の変遷を指摘するが、具体的な作品について字例を挙げて論証するものは稿者（遠藤）が管見にして目撃しないようである。今回は『蜀素帖』についての個別研究となつたが、これを米芾の代表作にあてはめ作品年代を系列すれば、その変遷は生涯をとおして確認できることが期待される。これは今後の稿者（遠藤）の課題としたい。

（平成二十六年十月二十四日稿）

参考文献

- ・米芾『書史』・米芾『宝章待訪録』1086・『宝晋英光集』・『海岳名言』・『米海岳年譜』・『群玉堂帖』・『米家書訣』・董其昌『画禅室随筆』・書跡名品叢刊『宋米元章苕溪詩卷他四種』二玄社 1961・『書道芸術』6 中央公論社 1975・『故宮歷代法書選集』2 中華民国故宮博物院 1977・中田勇次郎『米芾』研究篇 二玄社 1982・徐邦達『古書画過眼要録』湖南美術出版社 1987・『中国法書選ガイド』48 二玄社 1988・米芾臨王羲之『平安帖』〔玄筆〕8 1996

图1 米芾《蜀素帖》（冒头部分）

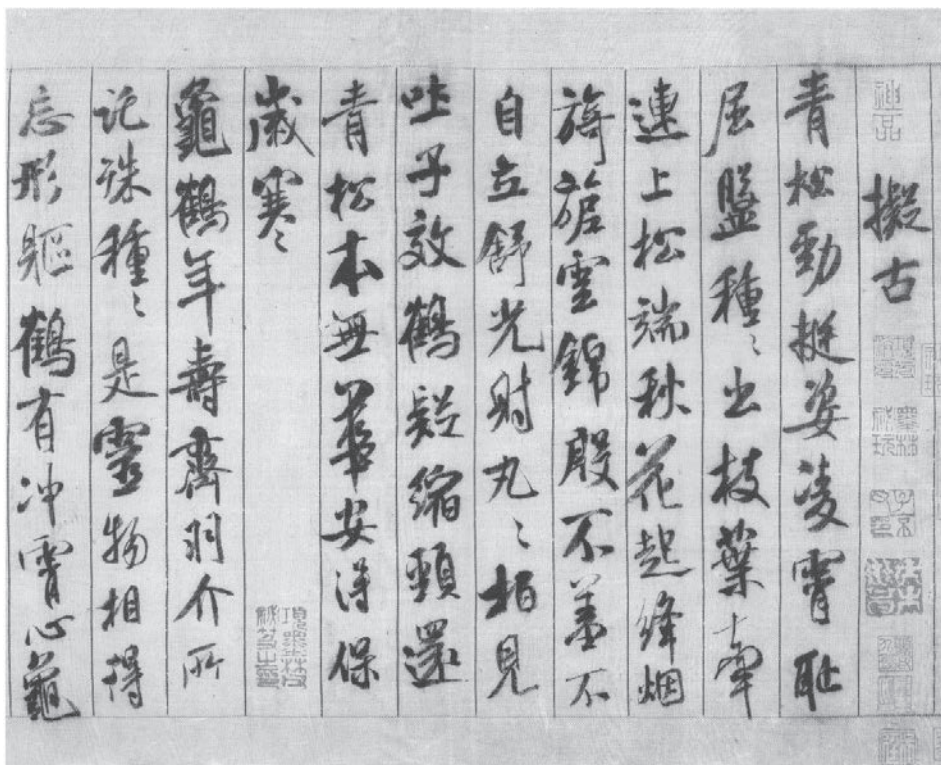


图2 米点山水（米芾《春山瑞松图》）

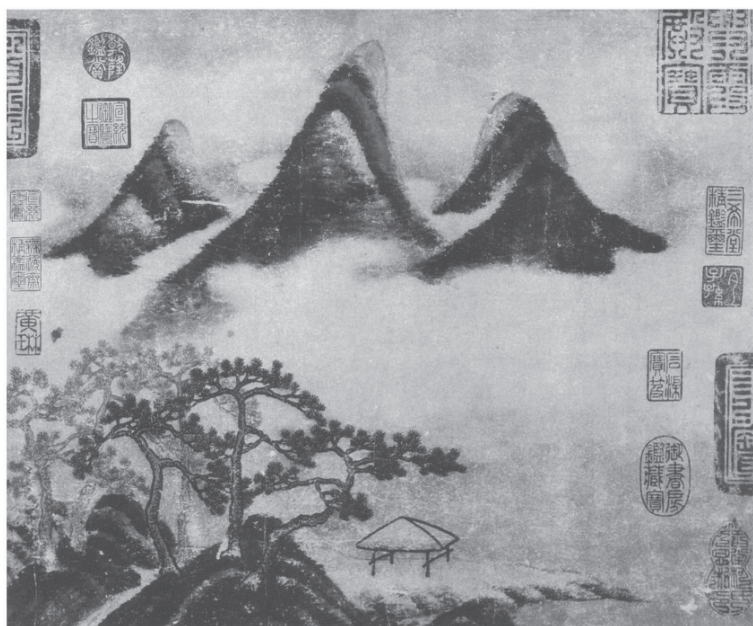


図3 褚遂良臨「蘭亭序」米芾跋文三十八歳二月

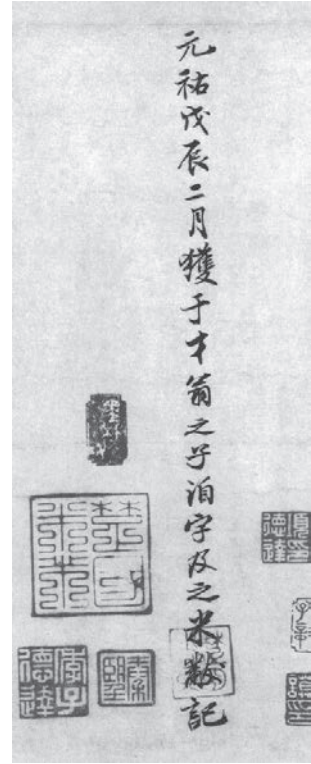


図4 「苕溪詩卷」(末尾部分) 米芾跋文三十八歳八月

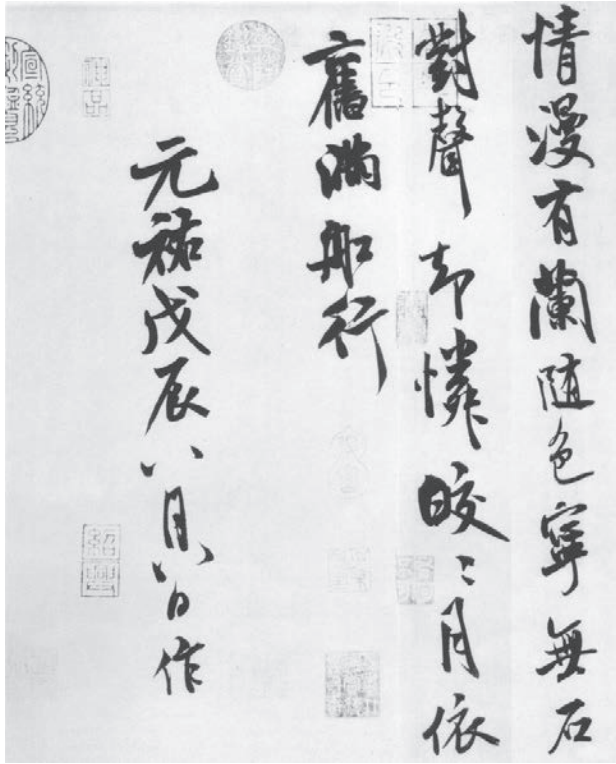


図5 「蜀素帖」(末尾部分) 米芾跋文三十八歳九月

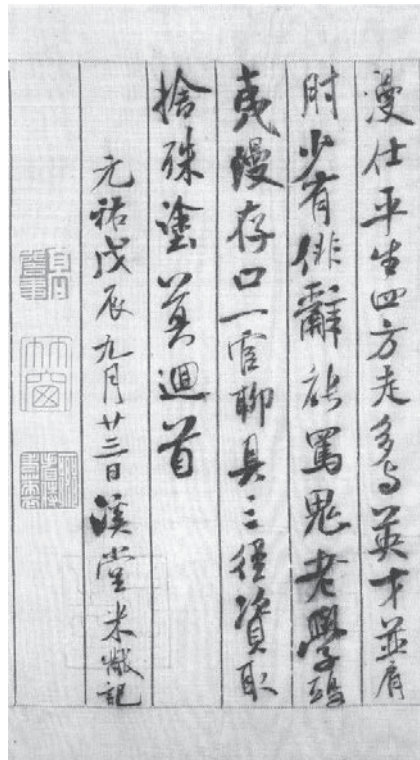


図6 「樂兄帖」(末尾部分) 米芾跋文四十四歳頃

* 二行目下より「監□□中岳祠米芾」の文字が見える。

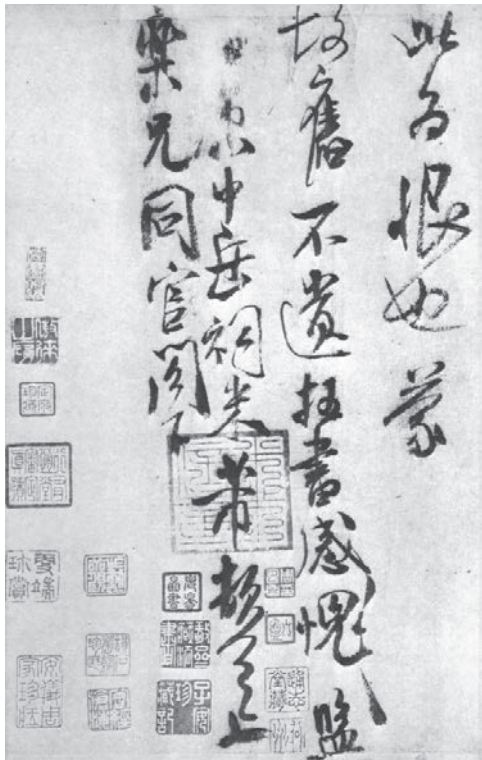
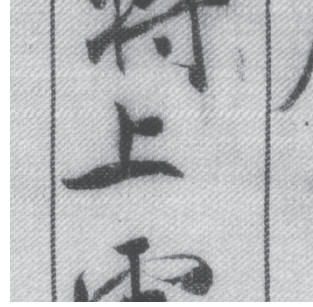


図7 「蜀素帖」における修正・訂正の文字



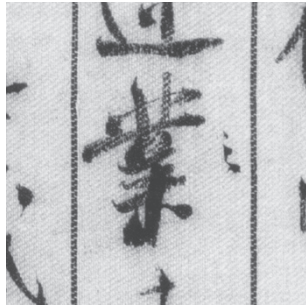
上



霜



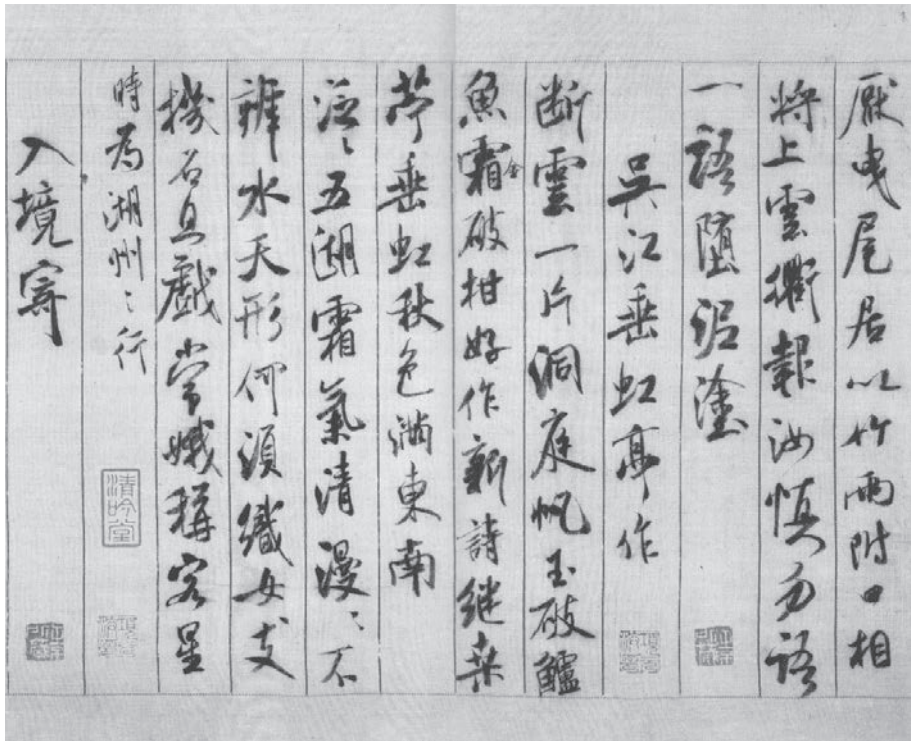
清



業

*十四行目「上」、次の字の「雲」の第一画を誤って書いたために、字全体が左に寄っている。十八行目「霜」、右脇に「金」を加筆して訂正している。五十九行目「清」、五十八行目下に「清」を書き、誤って再び同じ字を書いたために二点を加筆して消去している。六十三行目「業」、爾來器業とすべきところを爾來器としたために三点を加筆して消去している。

図8 「蜀素帖」途中部分（十三行目より二十四行目まで）



*図版の中ほどより字の大きさも小さくなり、字姿の左へ傾斜が強くなる。また字間が狭くなることで、いっそう自然なリズムで筆が運ばれている。

図9 「蜀素帖」における文字の特徴と変化(すべて原寸)



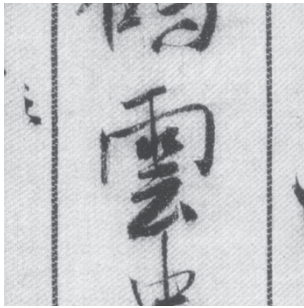
雲 (E)



雲 (C)



葉 (A)



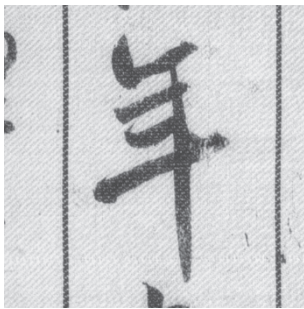
雲 (F)



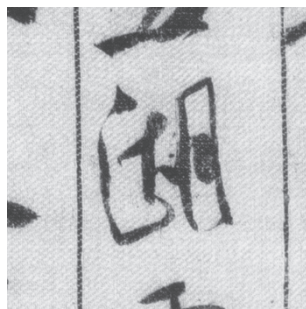
雲 (D)



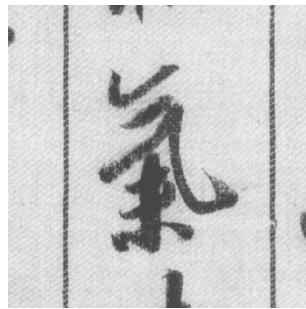
雲 (B)



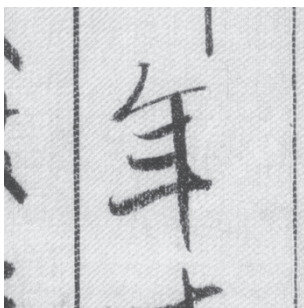
年 (K)



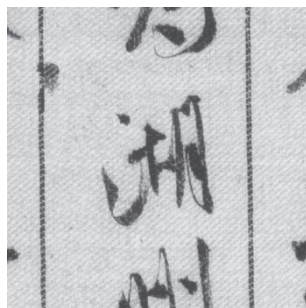
湖 (I)



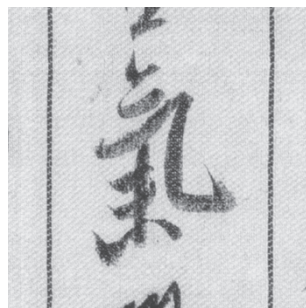
氣 (G)



年 (L)



湖 (J)



氣 (H)